

『後拾遺和歌集』の副助詞ダニ

——平安朝和歌における〈相対的輕少性〉の意義の一確認(其三)——

田中敏生

【論文概要】後拾遺和歌集から副助詞ダニの用例を取り上げて、この語の基本的意義を〈周縁波及性〉に求めるといふ観点から、その使われ方の記述を試みる。その際、ダニの用法を四つのタイプ(①願望表現、②仮定条件句、③否定表現、④類推表現)に分ちつつ、それぞれの用例において〈相対的輕少性〉の意義の發揮されるありさまを観察する。そのことを通して、群数性と程度量性との両契機を具備するという意味でのこの語の副助詞性をも確認する。

【キーワード】後拾遺和歌集 副助詞 ダニ 相対的輕少性 群数性 程度量性

はじめに

本稿は、『後拾遺和歌集』から副助詞ダニの用例を取り上げて、この語の基本的意義を〈相対的輕少性〉に求めるといふ観点から、その使われ方の記述を試みるものである。

ダニの基本的意義を「小」の側で捉えることは早くから行なわれているし、この語が複数の用法を持つことも古くから指摘されている。こうした研究の流れから引き出されてくる一つの課題は、想定される基本的意義に基づいてこの語の統一的理解を図ることであり、そのためには〈相対的輕少性〉の意義を立てることが有効であろう——そうした考え方から、これまで万葉集や三代集、また平安朝和文学作品などにおける用例について観察を試みてきた(文献⑦~⑭)。ここでは、前者にまつわる継続作業として、『後拾遺和歌集』に用例を求めながら、同様の検討を施したい。即ち、ダ

ニがある文中で用いられるとき、この語の接する語句が想定される他の要素に較べて相対的に小さな要因であること示すという点にこの語の基本的意義を求め、それぞれの用例においてこの意義の發揮されるありさまを見て行こうとする。それによって、この語の使用実態を些かなりとも明らかにしておこうというのが、本稿のねらいである。

周知のとおり、通俊が後拾遺和歌集を撰進したのは応徳三年(一〇八六)のことであり、白河上皇による院政の開始と恰も時を同じくするが、収められた歌は、村上天皇の頃から白河天皇の頃まで約一三〇年間のものであり、撰関政治華やかにし頃の文華を集めて、その残映にも及ぶ。本稿でも、およそこうした時期の歌言葉に材を仰ぐことになるわけである。

以下本稿では、右のような考え方のもとに、後拾遺集のダニ凡そ六十六例(注①)を、その構文環境の面から次のように分かちつつ検討を進めるが、それは、群数性と程度量性とを両々あい兼ね備えるという意味での副

助詞性(注②)を、この文献でのありように即して、確かめる作業ともなるであろう。

- (1) 願望表現 一七例
 - (2) 仮定条件句 九例
 - (3) 否定述語 一六例
 - (4) 類推表現 二四例
- 〔合計 六六例〕

一 願望表現

願望表現で用いられるダニは十七例見える。ここで願望表現というのは、命令形による命令や、助動詞「む」による意志、終助詞による希求など、事柄の実現を望む表現を広くさす。一般に願望表現で用いられるダニは、願望の内容にまつわる要素に接すること、その要素が、想定されるより大きなものから数歩引き下がった低い段階のものであることを示し、それによって、文全体としては「せめてもの願い」が表わされることになる。所謂「最低限願望」(文献③、三七頁・四〇頁)の用法である。(相対的輕少性)の意義がそのように發揮されると考えられよう。

願望を表わす形の面では、次のような種類が見られる。以下この順に検討を進める。

- 1…命令形によるもの 六例
- 2…「む」によるもの 三例
- 3…「てしがな」によるもの 三例
- 4…「じ」によるもの 三例
- 5…省略表現によるもの 二例

第一に、命令形とともに用いられたダニは、次の六例である。

①かぎりあらん仲ははかなくなりぬらん露けき萩の上をだにとへ(秋

上・二九九、和泉式部)

②みるめこそ近江の海にかたからめ吹きだにかよへ志賀の浦風(恋三・七二七、伊勢大輔)

③思ひには露のいのちぞ消えぬべき言の葉にだにかけよかし君(恋四・八一三、兼家)

④ながしとて明けずやはあらん秋の夜は待てかし真木の戸許をだに(雑二・九六七、和泉式部)

⑤白波の立ちながらだに長門なる豊浦の里のとよられよかし(雑六・二二六、能因)

⑥有明の月だにあれやほと、ぎすたゝひと声のゆくかたも見ん(夏・一九二、藤原頼通)

①は、八月の末に萩の枝につけて人のもとに贈った歌である(詞書)。「人と人との仲には限りがあつて空しくなつてしまったのだろう。(しかし)せめて露に濡れてしおたれている萩を尋ねてきてほしい」といった趣意を詠み込んでいる(注③)。「二人の仲が壊れないままであるのが何よりだが、それが望めないならせめて」といった含みが見て取れよう。望ましさの度合いにおいて相対的に低い段階に属する要素がダニによって掲げられている。それによって、最終的には「せめてもの願い」が表わされるわけである。

②は、夫の高階成順が石山寺に籠もつて久しく便りをよこさなかつたときの歌である(詞書)。近江の海は「みるめ」が生えないというのが歌人たちの通念であつたとされる(新大系・脚注)。歌意は「近江の海ですからみるめこそ取るのは難しいでしょうが、せめて志賀の浦風は吹いてだけでも通つてきてほしい(逢うのは難しくても、便りだけでもよこしてほしい)」といったふうになる。「実際に逢う——手紙が来る」といった序列のうちの、低いほうの要素を示すのにダニが用いられていると言えよう(注④)。

③は、「恋の思いに、このはかない命が（陽射しに露が消えるように）消えてしまふようなのです。せめてあなたの言葉にだけでも、（私のことを心に掛けるとおっしゃって）命を懸けてつなぎ止めて下さい」との意であろう。「恋の思いが成就する——命だけでもつなぎ止める」といった望ましきの序列が見て取られる。ダニもまたそうした軽重関係をふまえて自身の意義を供していると言えよう。

④は、詞書に《門遅く開くとて、帰りにける人のもにつかはしける》とある。よく似た状況のもと、蜻蛉日記の作者が「嘆きつつ」の歌を詠んだエピソードは著明であろう（天曆九年の条、小学館・新編、一〇〇〜一〇一頁。また大鏡・兼家伝、新編、二五〇頁。拾遺集・九一二にも）。その時には歌のやり取りがあったが、こちらは帰ってしまつてから歌を送っている。「いくら長い秋の夜でもいつかは明けるように、仮に手間取つたとしても戸を開けないということがあろうか（あるはずがない）。真木の戸をあけるほんのちよつとの間ぐらい待つてくれればよいのに」といった趣旨であろう。「長い間待つ——ほんの少しの間待つ」といった軽重差を明らかに見て取ることができる（注⑤）。

⑤は、これから長門の国へ下る人に贈つた歌である（詞書）。歌意は、「あなたはるか遠い豊浦へと行つてしまわれるが、そのつとよらに因んで、出立のついでにだけでもよいので、つとよと立ち寄る（とよる）つとよつとよをなさつて下さいね」といったふうに取りよう。人を訪ねるに際しての心の入れ方をめぐつて、「それをこそ目的として訪問する——ついでにちよつと立ち寄る」といった序列を考えれば、「立ちながら」の軽少要因性は明らかであろう。ダニもまた、そのような要素を掲げつつ自身の意義をはたかせるわけである（注⑥）。

⑥は、永承五年（一〇五〇年）に催された祐子内親王家歌合の、後宴での詠であり（詞書）、今鏡（巻四・雲のかへし）にも引かれている（文献⑩、八四頁）。「あれや」の「や」は『あゆひ抄』（文献⑨、一四六頁）に

言う「願ふ伏や」であり、この歌が証歌として掲げられている。里言は《テクレヨカシ》であり、実現を望む云い方であることが知られよう。ここでもダニは、「郭公が飛び去らずに居てくれる——飛んでいった方角だけでもながめる」といった望ましきの序列の中で用いられているわけである。第二に、助動詞「む」とともに用いられたものとしては、次の三例が挙げられる。

①夜もすがらながめてだにも慰めむ明けて見るべき秋の空かは（秋下・三七六、源兼長）

②今日ばかり霞まざらんあかで行く都の山はかれとだに見ん（羈旅・五二二、増基法師）

③しのびつ、やみなむよりは思ふことありけりとだに人に知らせん（恋一・六一〇、嘉言）

①は、九月末日に詠んだ歌である（詞書）。歌意は、「せめて一晚中眺めてだけでも名残惜しさを慰めよう。明日になつてしまえばもう秋の空ではないのだから」といったものである。「秋の空を引き続き眺めることができるならばそれが一番よいわけだが、それが叶わないなら」といった含みを汲み取ることができる。ダニもまた、望ましきのより低い段階に関わる要素を掲げるのに用いられていると言えよう。

②は、遠近江へ出かけるとき比叡山を思いながらの詠とされる（藤本全釈）。「今日だけは霞が立たないほしい。（都の山をまだまだ眺めていたのだが）せめて、あれがそうだな」とだけでも見たいから」といった意味を詠み込んでいる。「心ゆくまで見る——単に同定する程度に見る」といった序列を考えれば、「かれと」の軽少要因性は明らかであろう。ダニもまた、そのような要素を掲げ示すことで、「せめてもの願い」を表わすのに働くわけである。

③は、「人知れず恋慕つたまま終わつてしまふよりは、この人にはこのような思いがあつたのだということだけでもあの人に知らせよう」とい

った趣意の歌である。「その人と結ばれる——思っていたということだけでも知ってもらおう」といった序列は、たやすく読み取られるであろう。

第三に、「てしがな」とともに用いられたダニとして、次の三例がある。

①ひとりしてながむる宿のつまにおふるしのぶとだにも知らせてしがな
（恋一・六一七、藤原通頼）

②つれなくてやみぬる人にいまはたゞ恋死ぬとだに聞かせてしがな（恋一・六五八、中原政義）

③君をだに浮べてしがな涙川沈むなにも淵瀬ありやと（雑三・九八四、藤原元真）

①も、《おもふ心をしらせまほしきこゝろ》（抄）を詠んでいる。「一人物思いにふけつてゐる家の軒に生えている忍ぶ草ではないが」あの人のことを偲んでいるということだけでも伝えたいものだ」との趣意であろう。

ここでも、先の③と同様のあり方が看取されよう。

②も同様である。伏見の山荘として名高い俊綱の邸で、「恋」の題を探り得て詠んだ歌である（詞書）。「冷淡なまま終わってしまった人に、いまはただ、恋い死ぬ」ということだけでも聞かせたいものだ」と歌っている。

「思いが成就する——恋い死ぬとだけでも知らせる」といった序列を考えれば、庶幾する内容の軽少性は明らかであろう。

③は、詞書に《はらからなる人の沈みたるよしひにおこせて侍りける返事につかはしける》とある。「あなたをだけでも浮かべてあげたいものだ。涙の川に沈んでいるなかに、淵や瀬があるかどうか確かめてみたいから」との意であろう。「二人とも昇進する——一人だけでもそうなる」といった願望の序列が想定できる。ダニもまた、その低い方にまつわる要素を掲げるのに用いられているわけである。

第四に、助動詞「じ」とともに用いられたものは、次の三例である。

①さびしさに煙をだにもた、じとて柴折りくぶる冬の山里（冬・三九〇、和泉式部）

②山のはにかくれなはてそ秋の月このよをだにもやみにまどはじ（雑一・八六七、藤原範永）

③明けはまづたづねに行かむ山桜こればかりだに人におくれじ（春上・八三、橘元任）

①は、《百首歌という観念的な想像世界の中で山里への憧憬を》詠んだ歌とされる（川村氏「解説」・一三三頁）。歌意は、「人の居ない寂しさが耐え難いので、せめて煙だけでも途切れさせないようにしよう」と、この山里で柴を折りくべている」といったものであろう。「人が途絶えずに訪れてきて孤独を感じずに済むならそれに越したことはないが、それが望めないのでせめて」といった含みが読み取れよう。ここでもダニは、望ましさの度合いにおいてより低い段階に属する要素を掲げるのに用いられていると言えよう。

②は、詞書に《侍従の尼広沢にこもると聞きてつかはしける》とある。侍従の尼は伝未詳であり、広沢は右京区嵯峨広沢の遍昭寺かとされる。「月」で尼を暗に指しつつ詠んでいる。「秋の月は、山の端に隠れてしまわないでください。せめてこの世だけでも闇に惑うまいと思えますので」との意であろう。時間の範囲を「この世」と狭く限っている点に、その軽少要因性が明らかに見て取れよう。

③は、「山桜を訪ねることだけでも人に遅れまい」といった趣旨の歌である。春の歌であるが、季吟の抄は、《官位才覚等、人におくるる述懐なるべし》と注する。バカリは「僅かに」だけ」といったふうにな些少性・局限性を表わすものであり（注⑦）、そこにさらにダニを添えつつ、文全体としては「せめてもの願い」を表わすものとなっている。そうした中でバカリは、ダニの接する語句の軽少要因性を分節的に明示化するはたらきを担っており、それによって、「せめてこれだけは」といった気味あいが、より明瞭に打ち出されることになる。季吟が、先の注解に続けて《こればかりといふに、心ふかくこもれり》と評するのも、そうした事情を汲み取

つてのことであろう(注⑧)。

最後に、省略表現によるものとして、次の二例が見える。

①落ちつもある庭をだにとて見る物をうたてあらしの掃きに掃くかな(雑六・一二〇七、増基法師)

②これをだにかたみと思ふを都には葉がへやしつる椎柴の袖(哀傷・五八三、一条天皇)

①は、詞書に《紅葉の散りはてがたに風いたく吹き待ければ》とある。

歌意は「(紅葉のきれいな木を見ることができればいちばんよいのだが、それが叶わないなら)せめて庭に落ち積もった紅葉をだけでも目に取めておこうと思つて見ているのに、厭なことに、嵐が吹いてこれでもかというぐらいに吹き払つてしまふ」といったふうになる。「紅葉している木を眺める——庭に散り積もった紅葉を見る」といった序列を考えれば、その軽少要因性は明白であろう。

②は、詞書に《円融院法王うせさせたまひて又の年、御はてのわざなどの頃にやありけん、内裏に侍りける御乳母の藤三位の局に、胡桃色の紙に老法師の手のまねをして書いてさし入れさせたまひける》と述べられている。円融院の一周忌の法要は、正暦三年(九九二年)に仁和寺で執り行なわれた。「藤三位」は藤原繁子のこととされる。「この喪服をだけでも形見にと思つているのに、都ではもう、この椎柴の喪服を脱ぎ替えて常の服装にしているのであらうか」といった意味を詠んでいる。「円融院が亡くならず生きていくれる——喪服をだけでも形見にする」といった序列が想定できよう。ダニもまたそうした中で自身の意義を供していると言えよう(注⑨)。

以上の検討から、願望表現で用いられるダニは、願望内容を相対的に低い段階へと引き下げる形で「せめてもの願い」を表わすのに与ると認められるであろう。そのような形で《相対的軽少性》の意義の發揮されるさまが観察されるわけである。

二 仮定条件句と関わるもの

仮定条件句で用いられたダニは、九例見える。一般に仮定条件句で用いられるダニは、条件句を構成する要素に接することで、その要素が想定されるより大きな段階に較べて相対的に低い段階にあることを示す。それによつて、条件句全体としては、後件が成り立つための要件が、ほとんど最低水準とも言うべき段階のものでも十分であることが表わされる。その意味で「最低十分条件」と呼ぶことも許されよう。(相対的軽少性)の意義が、そのようにはたらくわけである。

①忘れなんそれもうらみず思ふらん恋ふらんとだに思おこせば(恋三・七六六、源高明)

②夜だに明けばたづねて聞かむほと、ぎす信太の森のかたに鳴くなり(夏・一八九、能因)

③たぐひなくうき身なりけり思ひ知る人だにあらば問ひこそはせめ(恋四・八〇〇、和泉式部)〔和泉式部集(正集・六九二)では下句《人よにあらばとひもしてまし》でダニは見えない(本文は大観・Ⅲ)〕

④やへぶきのひまだにあらば蘆の家に音せぬ風はあらじとを知れ(雑二・九五六、定頼)

⑤つれもなき人もあはれといひてまし恋するほどを知らせだにせば(恋一・六四六、赤染衛門)

⑥桜さへ(他本・さく)春は夜だに^なかりせば夢にもものは思はざらまし(春上・九八、能因)

⑦風だにも吹きはらずは庭桜散るとも春のほどは見てまし(春下・一四八、和泉式部)

⑧いたづらに身はなりぬともつらからぬ人ゆゑとだに思はましかば(雑一・八八二、不知)

⑨都いづる今朝許だにはつかにもあひみて人を別れましかば(別・四六

四、増基法師)

①は、「きつと忘れるだろう。しかしそれも恨むつもりはない。こちらの気持ちを、思っているだろう・恋い慕っているだろう」とだけでも思い遣ってくれるのでありさえすればよい」といった意味を詠み込んでいる。「恨みず」ということが成り立つためには、逢ってくれるとか優しい言葉をかけてくれるとかいったことは必要ではなく、自分のことを思い遣ってくれるという、ただそのことだけで十分だというわけである。条件句の内容を最低ラインとも言うべき段階にまで引き下げているありさまが見て取れる。そのような形で〈相対的軽少性〉の意義が発揮されていると考えることができる。

②は、郭公が信太の森のほうで鳴いていて、それを聞きに行くことが成り立つためには、「夜が明ける」というただそれだけの条件が揃えば十分だ、といった意味あいを詠み込んでいる。ここでもダニは、条件句の内容を最低限の段階にまで引き下げることにはたらいっている。〈相対的軽少性〉の意義においてそうするわけである。

③は、「この上なく辛い身の上だったことだ。もし私の思いを知る人だけでなくあれば、訪れてきてくれるはずなのだが(実際にはそんな人はいないから誰も来はしない)」との意であろう。私のもとを人が訪れてくれるということが成り立つためには、私の思いを知ってくれる人がいるという、ただそのことだけで十分だというのが、ダニによってもたらされる意味あいであろう。私のことを恋い焦がれてくれるとか、深く同情を寄せてくれるとか、そういう人だけでなくもよいわけであって、そうした意味で、ダニは、最低十分条件を構成するのに与ると言えよう。

④は、相模から《ことのはにつけてもなか問はざらんよもぎの宿もわかぬあらしを》と贈ってきたのに対する返歌である。訪ねてきてほしいむねを慫慂されたのに対して、「もし暇があれば、必ず行きます」と応じたわけである。「やへぶき」は、蘆を幾重にも重ねて葺いていることを言う。「そ

のような隙間のない中に僅かな時間でもあれば、それだけでもう一も二もなく」というのが、ここでのダニによってもたらされる意味あいであろう。そのような形で〈相対的軽少性〉の意義が発揮されるわけである。

⑤は、薄情な人の心を動かしたいむね詠んでいる。「ほど」は程度の意とされる(新大系・脚注)。これに従って意味を取ると、「どれほど私が恋い慕っているかを伝えさえすれば、冷たいあの人も心に触れるものがあるに違いない」といったふうになるであろう。その人が心の底からしみじみと感じ入ることによって必要なのは、自分の思いの深さを伝えるという、ただそのことだけで十分だといった意味合いが、ダニによってもたらされていると言えよう。

⑥は、《夜、桜を思ふといふ心》(詞書)を詠んだ歌である。「夜がない」という条件が整うならば、ただそれだけでも、桜のことで思い煩うということはせずに済む」といった意味を詠み込んでいる。ダニは、後件成立のための要件を大きく引き下げて、単に「夜がない」という僅かなものに限るはたらきをしている。この点に、〈相対的軽少性〉の意義の発揮されるありさまが見て取られるであろう(ダニは「なし」と共存しているが、仮定条件との結び付きのほうを第一義的と見てよいであろう)。

⑦は、詞書に《庭に桜の多く散りて侍りければよめる》とある。庭に散った桜であつても、それを見ていたい旨を詠み込んでいる。それが成り立つためには、風が吹き払うことをしないと、ただそれだけの要件が揃えば十分だというのが、ここでの仮定条件句によって表わされる意味である。ここでもダニは、最低十分条件の構成に与ると言えよう(注⑩)。

⑧は、詞書に《忍ぶることある女に中納言兼頼忍びて通ふと聞きて、男絶え侍りにけり、中納言さへ又かれくになり侍りければ、女のよめる》と述べられた歌である。歌意は「たとえ自分は誰からも顧みられない人間になつてしまつても、冷たくない人故だと思つても思うことができれば救われるのだが(実際にはそう思うことはできず、悲しい限りだ)」と

いうものである。自分が救われるということによって必要なのは、冷たくない人故にこうなったと思えるという、ただそのことだけで十分だ——そういう意味合いを表わすのにダニが用いられている。〈相対的軽少性〉の意義においてそれがなされるわけである。

⑨は、東へ行くために京都を離れる日に詠んだ歌である（詞書。「都を後にする今朝だけでも、ほんの僅かにでもその人に逢つてから別れることができる」とよいのだが（実際にはそんなことはできず顔も見ないまま別れることになる））といった趣意の歌である。『増基法師集』（大観・Ⅲ）には『三月十日、あづまへまかるに、つつみてあひみぬ人をおもふ』とあって、愛しい人を胸中に想い描いているらしい事情が窺われる。帰結部分は省略されているが、『せめてなぐさめむ物を』（抄）といった意味合いは明らかに汲み取れよう。それが成り立つためには、ほんの一目見るという、ただそれだけのことでよいということであつて、そうした条件内容の形成へと向けて、ダニの意義が供されていると言えよう（注⑩）。

こうして、仮定条件句で用いられるダニにあつても、条件句の内容を最低限とも言うべき段階にまで引き下げるという形で〈相対的軽少性〉の意義の發揮されているありさまが觀察されると言つてよいであらう。

三 否定述語

否定述語で用いられたダニは十六例見える。一般に否定述語とともに用いられるダニは、それをしも斥けるべきものとして軽少な要因を示すのはたらくと言えよう。最終的にはそれが否定と組み合わさることで「皆無性」を表わすものとなる。〈相対的軽少性〉の意義が、そのように發揮されるわけである。以下では、ダニの接する要素がどのような意味で軽少なあり方を帯びるかという点に意を留めつつ、用例を見てゆく。

第一に、次のような例では、ダニの接する語句自体に軽少なあり方が備

わると言えよう。

〔ひとつ〕

① な、へやへ花は咲けども山吹のみのひとつだになきぞあやしき（雑

五・一一五四、兼明親王）

〔また〕

② 夜もすがら待ちつるものをほと、ぎすまただに鳴かで過ぎぬなるかな

（夏・一九四、赤染衛門）

〔しるし〕

③ 思ふらんしるしだになき下紐に心ばかりの何かとくべき（恋一・六三

四、不知）

④ 年へたる松だになくはあさぢ原なにかむかしのしるしならまし（雑

四・一〇四四、江侍従）

〔かげ〕

⑤ ふるさとの三輪の山辺をたづぬれと杉間の月のかげだにもなし（雑

二・九四〇、素意法師）

〔あと〕

⑥ 鳥もゐで幾代へぬらん勝間田の池にはいひのあとだにもなし（雑四・

一〇五三、藤原範永）

〔なきうち〕

⑦ 数ならぬ身のうきことは世の中になきうちだに|入らぬなりけり（雑

一・九〇〇、小弁）

〔かけて〕

⑧ かけてだに|ころもの裏に玉ありと知らですぎけんかたぞくやしき（雑

三・一〇二五、中宮内侍）

①は、詞書に『小倉の家に住み侍りける頃、雨の降りける日、蓑借る人の侍りければ、山吹の枝を折りて取らせて侍けり、心もえでまかりすぎて又の日、山吹の心えざりしよしいひおこせて侍ける返りにいひつかはしけ

る」と述べられている。「実の一つ」と「蕘一つ」との懸詞仕立てによる歌であることはよく知られていよう。「一」が自然数でもっとも小さな数であることに議論の余地はない。ダニは、そのような要素を示すことで、「兩具の皆無性」を表わすに至る。《わずかな分量を引き合いにして否定を強調する》(注⑫)というメカニズムによってそれがなされるわけであって、〈相対的軽少性〉の意義もまた、そうした形において発揮されていると言えよう。

②は、郭公が一声しか鳴かなかったことを詠んでいる。「また〓再び」は、先の「一」にも似て、複数の中では最も小さな数を示すものであり、この点に軽少要因性が備わる。ダニもまたそのような要素を掲げつつ否定と組み合わせることで、「反復の皆無性」を表わすのに与ると言えよう。

③は、道命法師から《逢ふことはさもこそ人目かたからめ心ばかりはとけて見えなむ》と詠んで来たのに対する返歌である(注⑬)。相手からは「逢うのが難しくても、心だけはうち解けてほしい」と言ってきたのに対して「思っているというそのしるしさえなくて下紐が解けることもないのに、どうして心だけでもうち解けることができるでしょうか」と言い返したわけである。下紐が解けることは相手が強く恋い焦がれていることの「しるし」と考えられていた。夙く万葉集にも《我妹子し我を思ふらし草枕旅の丸寝に下紐解けぬ》(卷十二・三一四五。本文は新大系)の詠が見える。この例からも知られるとおり、「しるし」は、本体としての事象を彼方に秘めての徴候的な「あらわれ」であり、二次的な間接性を帯びる。ダニもまた、そうした意味での軽少な要素を示すことで、「人を思う心の皆無性」を表わすに至ると言えよう。

④は、河原の院で松を詠んだ歌である(詞書)。歌意は「(河原の院は今荒れ果てて僅かに年を経た松だけがその名残を留めているが)、もしこの松だけでも無いということになれば、この浅茅の生い茂った野原の中で、いったい何が昔のしるしとなるであろうか」といったものであろう。

ここでの「松」は、かつての河原の院の「名残」としてのあり方を帯びており、事実上、先の「しるし」と同じ働きをしていると見ることが出来る(注⑭)。ダニもまた、そのような語句に接することによって、「非在の徹底性」を表わすに至ると考えられるであろう(仮定条件句で用いられているが、否定との組み合わせを第一義的と見て、こちらで扱っておくことにした)。

⑤は、詞書に《三輪の社わたりに侍りける人を尋ぬる人に代りて》とある。古今(九八二)の《わが庵は三輪の山もと恋しくは訪ひきませ杉たてるかど》を踏まえるとされる(本文は新大系)。「三輪の山辺を訪ねたけれど、(杉間の月の光が見えないように)御当人はおろか、それらしい影も見えなかった」といった意味が詠み込まれている。この場合の「影」は、月との関わりでは「光」であるとともに、人とのそれでは「姿・形跡」を指すものともなっている(藤本全釈・下、三八七頁)。この後者の側面において、この語は、二次的・間接的なあり方を帯びるであろう。ダニもまたそのような語句を掲げることによって、「人の気配の皆無性」を表わすに至ると言えよう(注⑮)。

⑥は、頼通郎での歌会で「勝間田の池」を詠んだ歌である(詞書)。「いひ」は、「樋の口」(池の水を引くときの木製水量調節水門)のこととされる。また、勝間田の池は万葉集にもその名が見え(十六・三八三五)、枕草子の「池は」の章でも冒頭に出てくるが(小学館・新編で三六段、八八頁)、当時すでに名前だけの存在になっていたのではないかとされる。この歌でも、鳥どころか樋の口の趾さえも残っていないことが詠み込まれている。これまでの「しるし」や「かげ」がそうであったように、「あと」もまた二次的・間接的な軽少性を帯びる。ここでもダニは、そのような要素に接することで、「非在の徹底性」を表わすに至ると言えよう。

⑦は、詞書に《世の中はかなくて右大将通房かくれ待ぬと聞きて》とある。通房は頼通の子であり、疫病の流行で長久五年(一〇四四年)に亡く

なった。今鏡では享年十八歳と考えているので《齡もまだ廿にだにならせ給はぬに》と記されているが(卷四・梅の匂ひ、朝日・一六二頁。文献^⑩、八六頁)、弱冠二十歳での逝去であった(海野泰男『今鏡全釈・上』、三八八頁。新大系の脚注では栄花・卷三五「くものふるまひ」を引照する)。歌意は、「物の数でもない我が身のつらいことと言えは、世の中に存命しない人の内にも入らないことであつた」といったものであろう。「世の中のなきうち」とある点に、軽少要因性をはっきりと示されている。ダニは、そのような要素を掲げ示しつつ、「重要度の皆無性」を表わすのに与ると言えよう(注^⑬)。

⑧は、内侍が尼になつたとき、加賀左衛門から《いかでかく花のたもとをたちかへて裏なる玉を忘れざりけん》と詠んできたのに対する返歌である。「玉」は菩提心の譬えであるとされる。それを忘れなかつたことを褒められたのに対して、氣付くのが遅かつたことを述べて謙辞としている。菩提心があるなどとは思ひも懸けなかつたというわけである。ここでもダニは、「単に頭に思い浮かぶ」ことを掲げつつ否定と組み合わせることで、事態生起をめぐる「順当感の皆無性」を表わすのに与ると言えよう。(相対的軽少性)の意義がそのようにはたらくわけである(注^⑭)。

第二に、次のような例でも、歌全体の意味を勘案すれば、当該語句の軽少要因性が了解されるであらう。

〔〜と〕

①かくとだにえやはいぶきのさしもぐささしも知らじな燃ゆる思想ひを

(恋一・六一二、実方)

②来じとだにいはで絶えなばうかりける人のまことをいかで知らまし

(恋三・七五三、相模)

③さ、がにのいづこに人をありとだに心ほそくも知らでふるかな(恋

四・七九一、元輔)

〔その他〕

④いづかたと聞きだにわかずほと、ぎすたゞひと声の心まどひに(夏・一九七、嘉言)

①は、詞書に《女にはじめてつかはしける》とある。第一・二句は「こう思っていますとということだけでも、どうして言うことができよう」の意であらう。「恋しく思っているということだけでも告げる——思いのたけを具さに述べる」といった序列が考えられる。ダニは、その小なる要素を掲げ示しつつ反語による翻りを受けることで、「衷情伝達の全き不可能性」を表わすに至ると言えよう。先の願望表現にも、「思ふことありけりとだに人に知らせん」「しのぶとだにも知らせてしがな」といった云い方が見えたが、ここではその「僅かな望み」さえも叶わないことが趣意となるわけである。

②は、詞書に《中納言定頼、今はさらに来じなど言ひて歸りて、音もし侍らざりければつかはしける》と述べられている。歌意は、「もう来ませんとということだけでも言わずに仲が途絶えてしまったら、つらい人が、過たず言葉通りのふるまいをすること」をどうして知ることができたであろう(言つて下さつたからこそ、それが知られたのです)といったふうにならう。《精一杯の皮肉》(川村氏・頭注)である。訪れて来るつもりになつた人の言葉として、「来じ」というのは、言い訳がましい理由を縷々述べ上げることになれば、必要最低限のメッセージであると言えよう。ダニは、そのような要素を示しつつ否定と組み合わせることで、「告知の皆無性」を表わすものとなつている。歌全体の中では、それが仮定条件の中味になるわけである。

③は、在り処を知らない女に贈つた歌である(詞書)。「どこそこに居る」ということだけでも知らないままに心細く過ごしていることだ、との意であらう。相手の消息を知ることにとつて、居所が分かるというのは、日々の暮らしぶりや感情生活などが伝わることに較べれば、ごくごく基本的な事柄に過ぎず、その意味で軽少要因性が備わる。ダニは、そのような要素を

示しつつ否定作用を受けることで、「掌握情報の皆無性」を表わすと言えよう。

④は、長保五年(一〇〇三年)五月十五日に道長邸で催された歌会で「遥ニ郭公ヲ聞ク」という心を詠んだものである(詞書)。郭公が聞えたことに心を動かすあまり、単にどちらから聞えたかも分からないままに終わっただけである。郭公の鳴いた方角を知ることが、その声の性質や特徴、去年と異なる点や優れていた点などをこまごまと傾聴玩味することに比べるならば、単に物理的なレベルでの認知に過ぎない。この点に軽少要因性が備わると言えよう。ダニもまたそのような要素を掲げることで、「立ち入った享受の皆無性」を表わすのに与ると言えよう。

第三に、次のような例にあっても、ダニの接する語句はそれぞれに軽少なあり方を帯びていると言えよう。

①里人のくむだにいまはなかるべし岩井の清水みくさるにけり(雑四・一〇四三、嘉言)

②満つ潮の干るまだになき浦なれやかよふ千鳥の跡も見えぬは(恋一・六二五、祭主輔親)

③いかせん山のはにだにとまらで心の空に出づる月をば(雑一・八六九、道綱の母)

④けふ死なばあすまで物は思はじと思ふにだにもかなはぬぞうき(恋四・八一二、源高明)

①は、河原の院で詠まれた歌である(詞書)。この歌に続く松を詠んだ歌を、先の第一グループの④として掲げた。「岩井の清水」は河原の院にあった著名な井戸のこととされる。古今(一〇七九)の《わが門の板井の清水里とほみ人し汲まねば水草おひにけり》(神遊びの歌。本文は新大系)を踏まえている。歌意は「岩井の清水は水草に覆われている。里人が水を汲むことさえ今はないに違いない」といったものであろう。邸内に住まう人たちが使うのに較べて、近隣の里人が汲みに来るなどというのは、既に

衰えた段階に属すると言えよう。ダニはそのような要素を掲げつつ否定と組み合わせることで、「衰微の徹底性」を表わすのに与ると言えよう。

②は、手紙に返事をよこさない女に詠んで送った歌である(詞書)。「干る間」に「昼間」を掛け、「千鳥の跡」に手紙の意を込めている。「満ちる潮が干るといふ、そんな短い間も無い浦だからであろうか(そしてまた昼間さえも無いのだろうか)、通ってくる千鳥の跡も見られないことだ(お手紙を頂くこともないことだ)」と言い遣っている。干満を繰り返す海辺では、潮が引いてもまた満ちてくるのだから、浜辺の広く見える潮干の間というものは、ほんの短い間でしかない。ダニは、そのような要素に接することで、「時間的余裕の皆無性」を表わすに至ると言えよう。

③は、詞書に《入道撰政(兼家)物語などして、寝待の月(十九日の月)の出づるほどに、とまりぬべきことなど言ひたらばとまらむと言ひ侍りければよみ侍りける》と記されている。兼家が、「自分を引き留めることになりそうな歌を詠んだら泊まろう」と言ったのに対して、「どうすればよいだろう。山の端にさえ留まらずに上の空で出て行く月のようなあなたを」と詠んで応じている。背後の奥深い所に留まるのに較べて、山の端のほうが「軽い」留まり方でしかないことについて疑いの余地はない。ダニはそのような要素を掲げ示すことで、「滞在意欲の皆無性」を表わすと言えよう(文献⑦、一四五―六頁)。なお、蜻蛉日記によれば、このあと兼家は《ひさかたの空に心の出づといへば影はそこにもとまるべきかな》と詠んで、実際に泊まることになった(小学館・新編、一一二頁)。

④は、「今日の内に死んでしまつたら、明日になってまで思い煩うことはないだろうと、そう思うことだけでも叶わないのが辛いことだ」といった思いを詠んでいる。望みを遂げることで苦しい思いが消え失せるのに較べて、望みの元である命が絶えることで苦しみを感じなくて済むようになるというのは、何らの積極的な喜びをも伴わず、願望の対象として極めてネガティブなものに過ぎない。ダニは、そのような要素を提示すること

で、「願望成就の皆無性」を表わすのではたらくと言えよう(注18)。

以上の検討から、否定述語とともに用いられるダニにあつても、(相対的軽少性)の意義の発動しているありさまが確認されるであろう。

四 類推表現

類推表現とともに用いられるダニは二十四例見える。一般に類推表現で用いられるダニは、その接する語句の軽少要因性を示すことで、その事柄が小なる要素においても成り立つことを表わすのに加わり、そのことにおいて、類推の基盤となる事柄を形成するのに与る。(相対的軽少性)の意義がそのように發揮されるのだと言えよう。

類推表現のありようは、類推の基盤をなす事態および類推される事態の表わされ方の面から、次のように分けておくことができようかと思われる。

	基盤事態	類推事態	昂進性
a…典型的類推構文	◎	◎	◎
b…準典型的類推構文	◎	◎	/
c…暗示的類推構文	◎	△	/

即ち、aは、基盤事態と類推事態とがともに言葉に表わされ、かつ前者から後者への昂進性自体も「まして」「況や」といった言葉によって明示されるものである。bも、基盤事態と類推事態とが言語化される点では同じだが、昂進性を示す言葉は現われない。これらに対してcは、基盤事態だけが言い表わされ、類推事態は読み手の理解に俟って暗示されるに留まる。およそ以上のような小類に分かつことができるであろう。以下この順に見て行く。

第一に、a…(典型的類推構文)に属するものとしては、次の一例を挙げておくことができようかと思われる。

①さらでだに心のとまる秋の野にいとゞも招く花す、きかな(秋上・三

二六、源師賢)

①は、「野の花を遊ぶ」という心を詠んだ歌である(詞書)。歌意は「そうでなくてさえ心惹かれる秋の野で、その心をいや増すかのように花薄が招いていることだ」といったものであろう。「さらで」は、後統部で示されるような倍加要因の加わらないことを示すのだから、その軽少要因性は明らかであると言えよう。ダニもまた、そのような要素を提示することで類推の基盤となる事柄を形作るにはたらいっている。そこへ「薄が招く」ということが加わるとそれ以上に心惹かれるわけである。昂進性の明示には「まして」「況や」といった語句の用いられることが多いが、「いとゞ」もまた、所謂「連続的高度化」の程度量副詞であり(文献②、四六頁)、程度の量的な面から後統部における度合いの高まりを表わすという限りに、昂進性の明示にはたらくと見なしておくことも許されよう。そうした意味で、典型的類推構文としてのあり方を備えると認めることができるのではないかと思われる(注19)。

第二に、b…(準典型的類推構文)に参加するダニは十三例見える。強いて区分けを施すなら、左のようになるであろうか。

イ…認識的	六例
ロ…情意的	三例
ハ…行為的	四例

まず、イ…(認識的)なものとしては、次の六例を挙げることができる。

①さらでだに岩間の水はもるものをこほりとけなば名こそ流れぬ(雑二・九四三、下野)

②さらでだにあやしきほどの夕暮に萩吹く風の音ぞ聞こゆる(秋上・三一九、齋宮女御)

③きくにだに心はうつる花の色を見にゆく人はかへりしもせじ(秋下・三五二、赤染衛門)

④とはばやと思ひやるだに露けきをいかにぞ君が袖は朽ちぬや（哀傷・五四九、相模）

⑤いか許きみなげくらん数ならぬ身だにしくれし秋のあはれを（哀傷・五五一、前中宮出雲）

⑥いかならむ今宵の雨に常夏の今朝だに露の重げなりつる（夏・二二一、能因）

①は、詞書に《むつましくもなき男に名立ちける頃、その男のもとより、春も立ちぬ、今はうちとけねかしなどいひて侍りければよめる》とある。

「ただでさえ岩間の水は漏れるものなのに（浮き名は立ちやすいものなのに）、水が融けるように打ち解けると、あらぬ噂まで流れてしまおうでしょう」と詠んで、男の申し出を拒んでいる。タニは、噂が流れることをもたらす要因をより少なくしか備えない場合を示すことで、類推の基盤となる事柄を形成するのに加わっている。そこから類推される事柄もまた述べられているが、昂進性を明示する言葉はもはや見えない。そうした意味で、準典型的類推構文が形作られていると言えよう。

②は、《村上御時、八月許、上ひさしくわたらせ給はで、忍びてわたらせ給けるを、知らず顔にてことにひき侍ける》（詞書）という状況で詠まれた歌である（注⑳）。古今（五四六）の《いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べはあやしかりけり》を踏まえたものであり、「あやし」は《不思議なほど心引かれる》の意であるとされる（新大系・脚注）。歌意は、「ただでさえ不思議と人恋しい思いの湧く秋の夕暮に、（まるでその思いを高めるかのように）萩をそよがせる風の音すれが聞こえることですわね」といったものであろう。ここでも「さらで」の軽少要因性は分明である。後統部では昂進を促す要因だけが示されるが、「あやし」を繰り返すことは冗長に過ぎよう。そうした意味で、準典型的類推構文と認めることも許されるであろう。

③は、菊の花の噂を聞きつけて見に行った人の帰りが遅いので送り付け

た歌である（詞書）。「聞くだけでも夢中になりそうな花の色なのだから、出かけた人は捨になつて帰つてこないのではないかしら」と言い遣つている。菊の花を見実する人と伝え聞くだけの人とで、その感銘の受け方に格段の違いがあることに疑問の余地はなからう。タニはその低いほうの要素を掲げるのに用いられている。それを足場に、吸引力の高い場合へと思いをめぐらすわけである。

④は、万寿四年（一〇二七年）に妍子がお亡くなりになったころ、妍子にお仕えしていた女性に贈った歌である（詞書・前歌詞書）。「お訪ねしようと思つてあなたのことを思い遣るだけでも涙が出て参りますのに、ましておそばにいらつしやるあなたのほうは、どういうご様子でしょう、涙で袖が朽ち果てたのではございませんか」と相手の心中を推し測っている。ここでもタニは、悲しみに押しひしがれる要因をより少なくしか備えない要素を示すのに用いられている。そこから、まして云々の類推義もまた生じてくるわけである。

⑤は、長元九年（一〇三六年）に威子が亡くなり、ついで長暦三年（一〇三九年）妍子が世を去ったときに、威子にお仕えしていた出雲の御が、妍子付きの伊賀の少将に贈った歌である（詞書）。今鏡には《後一条の中宮に侍りける出雲の御といふが、この宮（＝妍子）に侍りし伊賀少将がもとに》（朝日・七二頁）として、この歌が紹介されている（文献⑩、八八～九頁。なお栄花物語・三四「暮まつほし」にも、第四句「知られし」の形で載せる。小学館・新編③、三〇三～四頁。文献⑩・注⑤）。歌意は「私のような数ならぬ身であつても時雨のように涙に濡れそぼつのであつてみれば、まして当事者であるあなたはどれほどお嘆きのことでしょう」といったふうに取りれよう。「数ならぬ身」とある点に、軽少要因性は明らかである。タニもまたそのような語句に接することで、類推の基盤となる事柄を形成すると言えよう。

⑥は、道済の家での歌会に《雨ノ夜常夏を思ふ》という心を詠んだ歌で

ある（詞書）。「雨のまだ降っていないかった朝露だけでも重たげだったのだから、まして今晩の雨でどれほど重みを受けて垂れ下がっているだろうか」と詠んでいる。露の重みを受ける度合いのより軽い場合を掲げるのにダニが用いられている。類推義は直叙的ではないが、事実上高度性の表現となっている。その意味で、典型的類推構文と認めておいてよいであろう。

次に、ロ…〔情意的〕なものとしては、次の三例がある。

⑦今年だに鏡と見ゆる池水の千代へてすまむかげぞゆかしき（賀・四五

六、藤原範永）

⑧天の川のちの今日だにはるけきをいつとも知らぬ船出かなしな（別・四九七、公任）

⑨うらみわびほさぬ袖だにあるものを恋にくちなん名こそをしけれ（恋四・八一五、相模）

⑦は、藤原師実（頼通男）が「六条の家」に引き移ろうとした時、池の水がいつまでも清らかだといった意味を人々が詠んだときの歌である（詞書）。この家は、今鏡（巻四・波の上の杯、朝日・一八三頁）にも、師通（師実男）が曲水の宴を催したことが記されていて、水にまつわる設備に優れていたらしいありさまが窺われる。歌意は「住み始めた今年から、早くも池の水は澄み切つて鏡のようだ。ここにずっと住んで、この清らかさが末永く続いてゆくだろうと思うと、そこに映る影がどのようなものであるのかを知りたいと思う気持が込み上げてくる」といったふうになるであろうか。掘つたばかりの井戸からは濁り水が出やすいように、作りたての池は工事の記憶も生々しく落ち着かないが、年月を重ねることで少しずつ馴染みも深まり、清澄さも加わつてゆくのであろう。そうした意味で「今年」は、軽少要因性を帯びる。ダニもまた、そのような要素を掲げること、類推の足場となる事柄を形づくるのに与ると言えよう。

⑧は、寂超法師が入唐のために筑紫へ下るといので船に乗つた時に、

公任の贈つた歌である（詞書）。ちょうど七月七日のことであった。「天の川で一年後の今日を約して別れるのであつてさえ再会が遠い先のことと思われるのに、あなたはいつ会えるとも知れぬ船出をなさるのですから、悲しくてなりません」と言い送っている。ダニは、待つ時間を長いと思わせる要因を相対的に少なくしか帯びない要素を掲げるのに用いられている。そこから、「まして期日の知れない旅立ちでは云々」といった類推義が引き出され、さらに「かなし」という思いも被さつてくる。そのような形で典型的類推構文が形作られていると言えよう（注⑨）。

⑨は、永承六年（一〇五一年）の内裏歌合の歌である（詞書）。「恨み疲れて涙に濡れ続ける袖だけでも大いに口惜しいのに、そのうえ恋に朽ち果てる私の評判ともなれば無念きわまりないことだ」との意であろう。意に染まぬ思いをもたらす要因を相対的に少なくしか持たない要素を示すのにダニが用いられている。そこから、類推義も自然と導かれるわけであつて、歌の表現もまた、そうした推論の流れに沿つて、組み上げられていると言えよう（注⑩）。

さらに、ハ…〔行為的〕なものとしては、次の四例が挙げられる。

⑩ちかきだに聞かぬみそぎをなにかその韓神まではとほく祈らむ（雑二・九四五、少将内侍）

⑪置く露にたわむ枝だにある物を如何でか折らん宿の秋萩（秋上・三〇一、橘則長）

⑫をらでたゞ語りに語れ山桜風に散るだにをしきにほひを（春上・八五、盛少将）

⑬あせにけるいまだにか、り滝つ瀬のはやくぞ人は見るべかりける（雑四・一〇五八、赤染衛門）

⑩は、詞書に《資良朝臣藏人にて侍りける時、園韓（そのから）神の祭の内侍に催すとて、禊すれどこの世の神は験なければ、園韓神に祈らむといひて侍りける返り事によめる》とある。「近い神様に祈つても聞き届け

ていただけなのに、どうして遠くの韓神に祈る必要がありましょう」との歌意であろう。神様との距離が近いか遠いかといった基準から見ても、「聞き届けてもらえない」ことの可能性をより少くしか備えない要素を示すのにダニが用いられている。そこから「まして遠い神様の場合は云々」といった類推義は容易に想定できよう。実際の表現では、より実践的に行為の問題として述べていると見ることがができる。そのような形で、類推の構造が実現しているのだと言えよう。

⑪は、自宅の萩の花を人に請われたときの歌である(詞書)。「露が置いてたわむだけでも充分可愛そうだと思ふのに、それを折るなどということはどうしてできようか」と断わっている。萩の花を愛おしむ気持ちを惹き起こすものとして、より低い段階の要素を掲げるのにダニが用いられている。類推義も、そこから引き出されるが、この歌ではそれが行為の次元に引き寄せて表わされていると考えることができよう。

⑫は、源雅道から《折らばをし折らばはいかゞ山桜けふをすぐさず君に見すべき》と詠んできたのに対する返歌である。「折らずに語つてほしい」と答えている。風に散るだけでも惜しいのに、わざわざ折るには及ばないと考えたわけである。ここでもダニは、愛おしさの思いをより少くしか抱かせない場合を示すのに用いられている。類推義が行為的な次元で表わされている点も先と同じである。

⑬は、大覚寺の滝殿を見て詠んだ歌である(詞書)。「水勢の衰えてしまった今であつても、このように見事に流れ懸かっている。もつとはやく滝を見るべきであつたことだ」との歌意であろう。景観美をもたらす要因をより少くしか備えない場合を示すのにダニが用いられている。ここでも類推義は、行為にまつわる規範的な次元において表わされている。そうしたあり方で類推構文が形作られていると言えよう。

第三に、c…(暗示的類推構文)で用いられたダニは十例見える。これらはさらに、次のように小割りにしておくことができる。

イ…基盤事態単独タイプ 五例

ロ…反戻事態提示タイプ 五例

まず、イ…(「基盤事態単独タイプ」のものとしては、次の五例を挙げる
ことができる。

①思へたゞ頼めでいにし春だにも花の盛りはいかゞ待たれし(別・四八三、源兼長)〔第二句「頼めで」は大養新釈に従う〕

②そのほどと契れる旅の別れだに逢ふことまれにありとこそ聞け(別・四九八、寂超法師)

③わりなしや心になふなみだに身のうきときはとまりやはする(雑一・八八四、源雅通の女)

④形見ぞと思はで花を見しにだに風をいとはぬ春はなかりき(雑一・八九九、弁乳母)

⑤天の原はるかにわたる月だにも出づるは人に知らせこそすれ(雑二・九六八、藤原道信)

①は、詞書に《能因法師、伊予の国より上りて、又降り下りけるに、人々くむまのはなむけして、明けむ春上らんと言ひ侍ければよめる》と述べられている。「この前約束をお聞きしなかつた時でも、花の盛りはどれほど待たれたことか」というのが第二句以下の意味であろう。「まして今度はお約束があるのですから、それ以上に待たれるに違いありません」といった意味は、そこから容易に汲みとられる。ダニが、待ち望む気持ちをかき立てる力を相対的に少くしか備えない場合を示すところから、そうなるわけだが、実際にはそれは言葉にされず、享受者の理解に俟って暗示されるに留まる。そうした意味で、暗示的類推構文が形作られていると言えよう(注⑬)。

②は、寂超法師が唐に渡る途次に源心に送った歌である(詞書)。「いついつ帰つて来ると約束している旅の別れでも、実際に再会するのは稀だと聞いている」といった意味を詠み込んでいる。そこから「ましていつ帰る

とも知れぬこのたびの別れは、すこぶる再会がおぼつかない」といった類推義は、言葉を俟たずして明らかであろう。(「相対的輕少性」の意義によつて、それがもたらされるわけである(注24))。

③は、定輔朝臣があまり訪れなくなつたときに、《とき／＼は引きとゞめよ》などと言つた人に対して詠んだ歌である(詞書)。「どうしようもないことです。心のままになる涙であつても、自分が苦しいときには留まるものでしょうか(留まりはしない)」と言ひ遣つてゐる。ダニは、「留まらない」ことをもたらす素因をより少なくしか備えない要素を示すのに用ひられてゐる。そこから「まして意のままにならないあの人の心をつなぎ止めることなどできはしない」といつた類推義もまた、言わずして明らかになると言えよう(注25)。

④は、妍子が亡くなつた翌年、その宮の梅の花が美事に咲いていたのを人々が残念がついていたときに詠んだ歌である(詞書、注26)。歌意は「形見の花だと思つて見ないときでさえ、風が吹くのを厭われない春はなかつた」といつたものであろう。ここでも、「まして形見の花ともなれば、散らずに咲いてほしいと願う気持はこれまで以上に強い」といつた類推義は、自ずから了得されるであろう。風を厭わせる素因をより少なくしか備えない要素がダニによつて示されるところから、そうなるわけである。

⑤は、詞書に《内より出でばかならず告げむなど契りける人の、音もせで里に出でなければつかはしける》とある。「大空を遙か遠くに渡る月でさえも、出て行くときは人に知らせるものなのですのに」との意である。「まして知らせると約束したあなたの場合は」といつた類推義は容易に想定されるであろうし、「それなのにあなたは」といつた反戻の事態のほうも、「こそ——すれ」の已然形に備わるとされる逆接性の響きとも相俟つて自ずと浮かびあがつてくるであろう。そうした意味で、ここでのダニもまた、暗示的類推構文を形作るのに与ると言えるであろう(注27)。

次に、ロ…「反戻事態提示タイプ」のものとしては、次のような例が見

られる。

①惜しまるゝ人なくなどてなりにけん捨てたる身だにあればある世に
(哀傷・五五八、中宮内侍)

②なき名立つ人だに世にはあるものを君恋ふる身と知られぬぞ憂き
一・六一三、実源法師)

③恋しさは思ひやるだになぐさむを心におとる身こそつらけれ(恋三・
七二二、藤原国房)

④けふ暮るゝほど待つだにも久しきにいかで心をかけて過ぎけん(恋
二・六七〇、伊勢大輔)

⑤ほどもなく恋ふる心はなになれや知らでだにこそ年はへにしか(恋
二・六六四、祭主輔親)

①は、高階成棟が父成順(注28)に先立たれたのを聞いて、中宮の内侍が贈つた歌である(詞書)。「(人徳高く)惜しまれる人のほうがどうして亡くなられてしまつたのでしょうか。世を捨てて出家してゐる身であつても、生きれば生きていられる世の中で」と言ひ送つてゐる。ここでのダニは、「生き長らえる」といつたことにとつて、その必然性をより少なくしか備えない人を掲げるのに用いられてゐる。そこから「まして人から惜しまれるような人は、それ以上に存命であるのが当然だ」といつた意味は容易に類推されるが、実際の表現では、それと背反する事柄のほうが提示されている。そのような形で、暗示的類推構文が形作られてゐると認められよう(なお、否定述語・第一グループに⑧として掲げた歌は、中宮内侍が出家したときのものである)。

②は、《初めの恋》(詞書)を詠んだ歌である。「実体が無くても噂の立つ人だつて世の中には居るのに、あなたを恋ひ慕つてゐる身だと知られることのないのがつらいことだ」といつた意味が詠まれてゐる。人に知られるといつたことをめぐつて、そうなる素因を相対的に少なくしか持たない場合を掲げるのにダニが用いられてゐる。そこから「まして実体のある場合

には、知られてもよいはずだ」といった類推義が引き出されるが、歌の表現としては、「思っているにも拘わらず知られない」という背反事項のほう言葉に示されるわけである。

③は、遠方に居る女に贈った歌である(詞書)。「恋しい思いは、遠くのことを思い遣るだけでも慰められる。(まして実際に逢えばどれほど心満たされることかと思われるが、実際には)遠くまで行くことのできない我が身が辛いことだ」との歌意であろう。「実際に逢う——思いを遠くへ馳せる」といった序列の中で、小さい方の要因を示すのにダニが用いられている。類推義はそこから容易に導かれるが、歌の表現としては、それに背反する事柄を示しつつ慨嘆の想いを表わすものになっている。

④は、人の所へ通っている人に代わって詠んだ歌である(詞書)。歌意は、「今日という日が暮れるの待っている間だけでも長いものに感じられるのに、いったいどうしてあなたに想いを懸けながら長い時間を過ごしてきたのだろう」といったものであろう。「久し」と感じる要因をより少なくしか備えない要素をダニによって示すことで類推義を暗示しつつ、それは背反する事態のほうを言い表わす。そのような形で暗示的類推構文が構成されていると言えよう。

⑤は、後朝の歌である(詞書)。「お逢いしてからどれほど経っていないのに恋しく思うこの心はいったい何だろう。まったく知らない状態でさえ、幾年も過ごしてきたのに」と詠んでいる。ここでもダニは、長期間を過ごすことに堪えうる要因を少なくしか備えない場合を掲げ示すことで類推の基盤となる事柄を形成するが、歌全体としては、類推されるのとは反対の事柄を示す形で類推構文が形作られるわけである(注⑳)。

こうして、類推表現を形作る三つの小類においても、それぞれに、〈相対的軽少性〉の意義の發揮されるありさまが観察されると言つてよいであらう。

むすび

以上、『後拾遺和歌集』のダニ凡そ六十六例について見てきた。それによつて、〈相対的軽少性〉というこの語の基本的意義が総ての用例において發揮されているありさまを確かめることができたのではないかと思われる。そのあらましを振り返れば、①願望表現や②仮定条件句にあつては、願望や条件の内容を譲歩的に引き下がった段階のものとして示すことで「せめてもの願い」や「最低十分条件」を表わすのに加わり、③否定述語との共存においては、それをしも斥けるものとして「小」なる要素を掲げること、「皆無性」表現をめぐる役割の一半を分かち担い持ち、④類推表現に際しては、小なる要素においても事柄の成立を表わすことで類推の基盤となる事柄を形成するのに働いていたのであった。この文献におけるダニは、以上のような意味合いにおいて、〈相対的軽少性〉の意義を有すると認めることができるであらう。

この語の副助詞性ということも、こうした基本的意義のありように基づいて了解されるであらう。ダニは、二事態の関係を踏まえる点で群数性を備えるとともに、その関係が軽重差に根ざしているという限りに程度量性をも帯びるのであつて、こうした二つの契機を融合的に重ね担い持つことにおいて、副助詞としてのありようを如実に示すのだと言えよう。この語を標札に掲げる『あゆひ抄』「だに家」(文献⑱、二四三頁)の根本性格もまた、こうした事情との関連において理解されるべきではないかと思われる。

最後に、これまでに調べ得たかぎり、ダニの用法別の用例数をまとめると、【表Ⅰ】のようになる(漢数字が用例数。左横のアラビア数字はその作品内での使用率。使用率は、合計が百になるよう微修正を施した)。

【表Ⅰ】

	願望	仮定	否定	類推	其他	計
古今	29	3	58	5	5	38
後撰	19	5	57	17	2	59
拾遺	21	6	44	29	0	52
後拾遺	26	14	24	36	0	66
蜻蛉	31	11	30	22	6	64
枕	5	16	34	40	5	73
大鏡	7	7	39	43	4	46
今鏡	8	4	42	46	0	26

もつとも、【表Ⅰ】では、蜻蛉以下の数値に和歌の用例数が含まれている。それを除いてまとめたのが【表Ⅱ】である（【表Ⅰ】と同様、使用率の合計を百にするため、微修正を施した。蜻蛉日記に見える長歌の一例も和歌の例に数えた）。

【表Ⅱ】

	願望	仮定	否定	類推	其他	計
古今	29	3	58	5	5	38
後撰	19	5	57	17	2	59
拾遺	21	6	44	29	0	52
後拾遺	26	14	24	36	0	66
蜻蛉	33	10	31	19	7	48
枕	4	16	32	42	6	69
大鏡	5	3	41	46	5	41
今鏡	0	0	52	48	0	22

これらの表から読み取られるのは、次のような事柄であろう。

第一に、願望用法のダニは、散文では枕以降で大幅に減るが、和歌では必ずしもそうではなく、依然活勢を保っている。

第二に、仮定条件句での用法は全般に少ないが、和歌では後拾遺に、散文では蜻蛉や枕に、やや活勢が見られる。

第三に、否定述語とともに用いられるものは全般に使用頻度が高いが、後拾遺では類推用法に歩を譲り、散文でも枕や大鏡に同様の傾向が見られる。

第四に、大きくはそれと重なることだが、類推用法は、和歌でも散文でも時代が降るにつれて概ね勢いを増してゆく。

こうした事柄の背後にどのような事情が潜んでいるのか（あるいは、いないのか）については、事実確定のための更なる調査とともに、今後の究明に俟たねばならない。

冒頭にも記したように、平安朝和歌のダニについては、これまで三代集を時代順にたどってきたが、ここではその継続作業として、この第四勅撰集に探索の手を延べてみたのであった。

〔付記〕『後拾遺和歌集』の本文は次の文献に依る。

・新日本古典文学大系『後拾遺和歌集』（久保田淳・平田喜信 校注 一九九四 岩波書店）

用例の掲出については、次のような行き方をとった。

・末尾に（部立・大観番号、作者）を示した。
 ・作者名は、「前大納言公任↓公任」「入道撰政↓兼家」のように、適宜簡略化した。

・「よみ人しらず」は「不知」で示した。

歌の解釈等に際しては、次の諸書を参照した。

・川村晃生『後拾遺和歌集』（一九九一 和泉書院）
 ・藤本一恵『後拾遺和歌集全釈（上・下）』（一九九三 風間書房）

- ・犬養廉・平野由紀子・いさら会『後拾遺和歌集新釈(上・下)』(一九九六)七 笠間書院
- ・川村晃生『能因集注釈』(一九九二 貴重本刊行会)
- ・佐伯梅友・村上治・小松登美『和泉式部集全釈(正集篇)』(二〇〇二 笠間書院)

関連する散文作品については次の書物を用いた。

- ・新編日本古典文学全集『土佐日記 蜻蛉日記』(木村正中・伊牟田 経久 校注・訳 一九七三 小学館)
 - ・新編日本古典文学全集『枕草子』(松尾聰・永井和子 校注・訳 一九九七 小学館)
 - ・新編日本古典文学全集『源氏物語③・⑤』(阿部秋生ほか 校注・訳 一九九六・七 小学館)
 - ・新編日本古典文学全集『大鏡』(橋健二・加藤静子 校注・訳 一九九六 小学館)
 - ・新編日本古典文学全集『栄花物語③』(山中裕ほか 校注・訳 一九九八 小学館)
 - ・朝日古典全書『今鏡』(板橋倫行 校註 一九五〇 朝日新聞社)
 - ・海野泰男『今鏡全釈(上)』(一九八二 福武書店)
- これらを引照する際には、「新大系」「川村氏」「藤本全釈」「犬養新釈」「川村注釈」「佐伯全釈」「小学館新編」「朝日」などの略称を適宜用いた。

注

- (注①) 文献②・一七二頁の表でも、合計数を取ると六十六例となる。
- (注②) 群数性と程度量性との二つの契機を骨子とする副助詞の類的性格把握は文献②に基づく。この観点を取るこの意味については、文献①の「むすび」参照。

(注③) 第三句は、川村氏の頭注に《なりぬとも》(他本)に改むとあり、和泉式部集(正集・七五六。本文は大観・Ⅲ)でも同様である。このほうが自然に思えるが、姑く底本(書陵部本)本文のまま意味を取っておいた。

(注④) 後撰集(七七二)に次の歌があつて、よく似た仕立て方の歌になっている(文献⑤、八四頁)

・見るめ刈る方ぞあふみになしと聞く玉藻をさへや海人は潜かぬ

(注⑤) 和泉式部集(正集・七六六)では、次のようになっている(佐伯全釈による。スペースも原文に従う。新編大観では、第二句を「あけてやは」とする)。

・秋の夜もあけでやは止む 来(き)と来(き)なば待てかし 横のとばかりをだに

「横の(板)戸」については次の歌がよく知られていよう(古今・六九〇。本文は新大系。六帖・一三七〇では、第三句「やすらひに」、第四句「板戸」を)。蜻蛉日記にもこの歌をふまえた軽妙な言葉の応酬が見られる(小学館・新編、二七三頁。文献⑦、一四六頁)。

・きみや来む我や行かむのいさよひに横の板戸もさ、ず寝にけり

(注⑥) なおこの歌は能因集(一〇〇)にも収められている。その詞書は《則長朝臣いまなむながとへくだるといひおこせたるに》(大観Ⅲ)であり、川村注釈によれば、相手は橋長(能因と同族)である。

(注⑦) 「あゆひ抄」の「のみ家」では、バカリの特徴を《その一つにて二つ三つにおよばぬ心》(文献⑩、二四〇頁)と説く。文献⑩⑪では、成章のこの考え方に基づきつつ、枕・大鏡などの用例を検討している。

(注⑧) 「ばかりだに」の形が願望表現に用いられたものとしては、源氏物語(真木柱)に次の例が見える(小学館・新編③、三六七頁)。北の方から香炉を投げつけられて灰まみれになったあとの髭黒の思である。玉鬘を自邸に迎え入れるまでだけでも、北の方との間に悶着が生じて不評の種になるようなことは起こって欲しくないと考えている。

・(髭黒は)心の中にも、(北の方が)このころばかりだに、「物の怪に憑かれずに」事なくうつし心にあらせたまへと念じたまふ。

(注⑨) なおこの歌は『枕草子』にも見える(円融院の御果ての年)小学館新編・一三二頁、二五〇頁。文献⑧、二六八・九頁)。

(注⑩) なお『蜻蛉日記』にもよく似た仮定条件句が見える(小学館・新編、一七六頁。文献⑦、一四二頁)。

・風だにも思はぬかたに寄せざらばこの世のことはかの世にも見む

(注⑪) 「ばかりだに」の形が仮定条件句で用いられたものとしては、源氏物語

〔竹河〕に次の例が見える（小学館・新編⑤、八九頁）。蔵人の少将（夕霧の子息）は、大君（玉鬘の娘）に想いを懸けていたが、大君は冷泉院に参院する。その失意の思いを述べる言葉である。お気の毒に思うと、そう一言だけなりともおっしゃって頂ければ、死なずにすむかもしれせん、との意であろう。

・「今は限りと思ひはつる命のさすがに悲しきを。あはれと思ふ、とばかりだに一言のたまはせば、それにかけてどめられて、しばしもながらへやせん」

〔注12〕 文献②・二二頁。同書には《弱数量叙述》（九二頁）という呼び名も見える。

〔注13〕 伊勢に次の歌（拾遺集・九五二）があつて、上句の言い回しが似ている（文献⑬、一九六頁）。

・さもこそ逢ひ見むことのかたからめ忘れずとだに言ふ人のなき

〔注14〕 河原の院の松を「しるし」として詠んだものとしては、拾遺集（四六一）に次の歌が見える（文献⑯、七七頁）。

・行末のしるし許に残るべき松さへいたく老いにける哉

〔注15〕 拾遺集（一二三六）には次のような歌が見えた（文献⑬、一九五頁）。

・世の中はいかがはせまし茂山の青葉の杉のしるしだになし

〔注16〕 拾遺集（一三〇〇、哀傷）の次の歌もよく似た仕立て方になっており、新大系・脚注にも引かれている。詠歌の場面（為頼への返歌）については、文献⑬・一九九頁。

・常ならぬ世は憂き身こそ悲しけれその数にだに入らじと思へば
〔注17〕 「かけてだに」の云い方は、既に後撰集（一四二二）に見えた（文献⑫、一七頁）。

・かけてだに我が身の上と思ひきや来む年春の花を見じとは（伊勢）

そこでも述べたように、文献⑫には動詞「かく」の意義分析が見えて後撰の例が「動詞ばなれ」を遂げたものとして掲げられている（二三三頁）。また文献①には、動詞「かく」にまつわる用例が、「かけて」の場合をも含めて幅広く集められている。後拾遺集で「かけて（も）」が反語や否定と関わるものとしては、次のような例が見られる。

・紫の雲のかけても思ひきや春の霞になして見むとは（五四一）
・いかにせんかけてもいまは頼まじと思ふにいとぬる、たもとを（六三九）
・ころもなる玉ともかけて知らざりき酔ひさめてこそうれしかりけれ（一九四）

〔注18〕 新大系・脚注では、和泉式部集（正集）に《いかなる人にかいひ侍る》

（大観・Ⅲ）として収める八首の内の一（五四四）であるむね指摘し、《作者はやはり和泉式部と見るべきか》と注する。

〔注19〕 成章の『換玉帖』（文献④、一一一六頁）では、和歌一首の形式的な意味構造（成章の用語法では「旨・趣」）を分析するに際して「サラスタニイト、」の言い回しを用いているが、このことも、この語が（程度量的な側面での限りに）意味の形式的な側面に関わるといった性格を多分に有しているであろうことを示唆している（文献⑥、一六八―九頁）。なお、「かざし抄」（文献⑤、五四頁）では「いとど」の訳し方を、「タッサヘ・イトッサヘ」と「一倍」とに分けている。

〔注20〕 『斎宮女御集』（大観・Ⅲ）の詞書（など）は次のようであり、また初句は《秋の日の》であつてダニは見えない（一五）。

・《うへ、ひさしうわたらせ給はぬ秋のゆふぐれに、きむをいとをかしうひき給ふに、上、しろき御ぞのなえたるをたてまつりて、いそぎわたらせ給ひて、御かたはらにおさせ給へど、人のおはするともみれさせたまはぬけしきにてひき給ふを、きこしめせば「秋の日のあやしきほどのゆふぐれにをぎふくかぜのおとぞきこゆる」とききつけたりしこちなむせちなりしとこそ御日きにはあなれ》

なお、新大系（底本＝書陵部本）詞書の「ことにひき侍ける」は、季吟の抄では《琴ひき侍る》である。

〔注21〕 なおこの歌は、拾遺集（一〇九三）にも見える（文献⑬、二〇〇頁）。

〔注22〕 後撰集（一三四〇）に次の歌があり（文献⑫、一八頁、新大系・脚注にも引く）。

・来むと言ひて別る、だにもある物を知られぬ今朝のましてわびしさ（時平）

〔注23〕 第二句は「頼めて」と読まれる場合が多いが、犬養新釈（上巻）に《歌意から考えて「たのめて」では無理があり、ここは「たのめで」と打ち消して考えたほうが妥当である。「あなたが帰ってくるにあてにさせずに行ってしまった春でさえ（だに）」とすれば、軽いものを挙げて重いもの（あなたが帰ってくる春）を類推させる副助詞「だに」が生きてくることになる》（佐藤久美子氏筆）とされるのに従った。

〔注24〕 先にbの⑧として掲げた公任の歌（四九七）も寂超渡唐の際の歌である。

〔注25〕 拾遺集（三三二）の次の歌でも、「涙」が統御可能なものとして扱われている（文献⑬、一九九頁）。

・惜しむともかたしや別れ心なる涙をだにもえやは留むる
〔注26〕 『弁乳母集』（大観・Ⅲ）では「大納言殿」と連歌をしたあとの、次の

歌に対する応答歌(二〇)としてこの歌を載せる(新大系・脚注)。

・かをとめて君がかたみにをしまるるはなのすがたはかせもよけなん(十九・大納言殿)

(注27) 拾遺集(四三七)に見える次の歌も、よく似た仕立て方になっている(文献13、二〇一頁)。

・雲井にてあひ語らはぬ月だにも我が宿過ぎてゆく時はなし(伊勢)

(注28) 高階成順は伊勢大輔の夫であった。成順が石山寺にこもったときの大輔の歌を、願望用法②の例として掲げた。成順の一周忌の法要で大輔の詠んだ歌も後拾遺に収める(五八五)。なお成順の父・明順は中宮定子の叔父であり、枕草子にも、清草子にも、清草子が時鳥を聞きに遠出をした時に手づから摘んだ蕨を供応するエピソードが見える(小学館・新編、一八六頁)。

文献⑧、二八四頁)

(注29) 上句の「何なれや」は、『あゆひ抄』(文献19)では「疑ふ伏や」(一四三頁)と呼ばれ、『ささぬ中のや』に似たれど、下の打ち合ひ、かれと同じからぬ例多し(一四四頁)とされる事象に該当する。意味については『なれや』を「チャヤラ」と心得べきなり(同)とされている。

参考文献

- ① 井上博嗣(一九九六)「古代語の陳述副詞について——「かけて・かけても」の場合——」『女子大国文』二二〇号(京都女子大学)
- ② 衣畑智秀(二〇〇五)「副助詞タニの意味と構造とその変化——上代・中古における——」『日本語文法』五巻一号
- ③ 鈴木ひとみ(二〇〇五)「副助詞サエ(サへ)の用法とその変遷——ダニとの関連において——」『日本語学論集』一号(東京大学)
- ④ 竹岡正夫(一九六二)『富士谷成章全集・上巻』(風間書房)
- ⑤ 竹岡正夫(一九七三)『かざし抄新注』(風間書房)
- ⑥ 田中敏生(一九九八)「精神作用と事態関係——成章『換玉帖』における〈旨・趣〉分析の諸類型——」『四国大学紀要(人文)』一〇号
- ⑦ 田中敏生(二〇〇七)『蜻蛉日記』における副助詞タニの諸用法とそに関連——〈相対的軽少性〉の意義に基づく統一的理解の試み——『四国大学紀要(人文)』二八号
- ⑧ 田中敏生(二〇〇八)『枕草子』の副助詞タニ——中古における〈相対的軽少性〉の意義の一確認——『四国大学紀要(人文)』三〇号
- ⑨ 田中敏生(二〇〇八)『大鏡』の副助詞タニ——平安時代における〈相対的軽

- 少性〉の意義の一確認——『言語文化』六号(四国大学)
- ⑩ 田中敏生(二〇一五)『今鏡』の副助詞タニ——平安末期和文における〈相対的軽少性〉の意義の一確認——『四国大学紀要(人文)』四五号
- ⑪ 田中敏生(二〇一二)『古今和歌集』の副助詞タニ——〈相対的軽少性〉の意義をめぐって——『四国大学紀要(人文)』三八号
- ⑫ 田中敏生(二〇一五)『後撰和歌集』の副助詞タニ——平安朝和歌における〈相対的軽少性〉の意義の一確認——『言語文化』十三号(四国大学)
- ⑬ 田中敏生(二〇一六)『拾遺和歌集』の副助詞タニ——平安朝和歌における〈相対的軽少性〉の意義の一確認(其二)——『四国大学紀要(人文)』四六号
- ⑭ 田中敏生(二〇一四)『万葉集』の副助詞タニ——上代における〈相対的軽少性〉の意義の確認——『四国大学紀要(人文)』四二号
- ⑮ 田中敏生(二〇二三)『後撰和歌集』の副助詞サヘ——平安朝和歌における〈周縁波及性〉の意義の一確認——『四国大学紀要』三九号
- ⑯ 田中敏生(二〇二三)『拾遺和歌集』の副助詞サヘ——平安朝和歌における〈周縁波及性〉の意義の一確認(其二)——『四国大学紀要(人文)』四〇号
- ⑰ 田中敏生(二〇〇八)『枕草子』の副助詞バカリとノミ——中古における役割分担の一確認——『四国大学紀要(人文)』二九号
- ⑱ 田中敏生(二〇〇七)『大鏡』の副助詞バカリとノミ——平安時代における役割分担の一確認——『四国大学紀要(人文)』二七号
- ⑲ 中田祝夫・竹岡正夫(一九六〇)『あゆひ抄新注』(風間書房)
- ⑳ 森重 敏(一九五四)「群数および程度量としての副助詞」『国語国文』二二巻二号
- ㉑ 森重 敏(一九五八)「程度量副詞の設定」『国語国文』二七巻一号
- ㉒ 山田小枝(一九九七)『否定対極表現』(多賀出版)
- ㉓ 渡辺 実(一九七八)「同根の動詞・副詞・接尾動詞」『論集日本文学・日本語』5 現代(角川書店)

(田中敏生 四国大学文学部国語学研究室)